

伊勢物語の相補的解釈

——一章段内の部分単位での考察——

田 口 尚 幸

一 序

伊勢物語と言えば成立論、というような傾向がある。成立論とは、伊勢物語を成立の早い章段・部分／遅い章段・部分に分類したうえで、前者から後者への質的変遷や、増益の仕組について論じる解釈である。¹⁾

しかし、どこまで具体的に成立の早遅を特定できるのか。もし特定不可能なら、成立論的時間軸にこだわらず、全てを同一平面にならべて読むという安全策をとるほかないのではないか。また、成立論的解釈では、〈初原的〉と想定する部分と〈付加的〉と想定する部分がひとつづきになっている場合、成立の次元が異なるという理由から、前者から後者への質的変遷というとらえ方をするか、または、後者がどうして〈付加〉されたかを問題にする。しかし、そういう具合に一方方向的あるいは不可逆的な時間の流れに沿って分析すれば、何かが見えなくなるおそれがある。現存本が完成した時点＝最終的編集者の視点

に立ち、成立論的時間軸を意識せずに各章段・部分を眺めれば章段・部分どうしが全方向的に影響し合う関係＝相補的關係のなかから何かが見えてくるはずである。つまり、成立論的解釈に対しては、読みの礎となる段階分けの信憑性だけでなく、読みそのものの豊かさに関しても、疑問が生じるのである。

本稿では、一章段内に〈初原的〉な部分と〈付加的〉な部分が混在すると言われている一六・八一・八二・八七段をとりあげ、右の二点に注目して、部分単位での微視的な成立論批判を行う（ちなみに、本稿は、章段単位でのより巨視的な成立論批判を行った前稿「伊勢物語の相補的解釈——その序説としての試論——」の続編なので、そちらも併読されたい）。

なお、本稿中の【表2】・【表3】・【表5】・【表6】は、一六段・八二段・八七段第一部・八一段の本文（上段）と、その収録歌と同一または類似の歌を載せる外部資料の詞書（下段）を比較したものであるが、伊勢物語の本文は新潮日本古典集成、外部資料の古今集・後撰集・万葉集・在中将集・雅平本業平集

の詞書は新編国歌大観によつてゐる。ただし、外部資料の表記に關しては、比較のしやすさを考慮して適宜私に改めた。

二 相補的解釈の基本理念

はじめに、相補的解釈の基本理念を簡単に説明しておこう。

【表1】は、前稿にも掲載した対照表である。私は、これまで、

成立論の段階分けの文献的論拠のいくつかについて、それらが絶対と言へるかどうかを検討してきた。⁽³⁾そして、成立論の段階分けに依拠するのは現時点では危険であるという結論に至つた。従つて、当然、読みのスタイルも、「初原的」と想定する章段・部分から「付加的」と想定する章段・部分への変化を論じるダイナミックな形式にはならない。成立論的な時間の流れは意識せず、完成した時点Ⅱ同一平面で全てを考える。もちろん、

【表1】

| 成立論的解釈 | 相補的解釈 |
|--|--|
| <p>具体的な段階分けを行う。</p> <p>成立段階ごとに質的な相違が見られると考え、質的変遷という形のなかに伊勢物語の本質を求め、初原的グループ↓付加的グループという成長・増益モデルをつくり、そのグループごとの作者（原作者）の作風の変化をダイナミックに論じる。</p> <p>最終的編集者の仕事よりも、想定した各成立段階ごとの作者（原作者）の仕事重視する。そして、その作者（原作者）の意図を考え、それを成立論的時間軸に沿つて整理することで、読みが完了する。</p> <p>一次↓二次↓三次といったモデルの不可逆的な時間の流れに従う。また、「AからBへの影響」というより、「AからBへの変化」という読み方をする。</p> <p>章段単位で初原的／付加的の別を考えるだけではない。一章段内の部分単位でも、初原的／付加的の別考えることがある。</p> | <p>具体的な段階分けは危険と考え、行わない。</p> <p>各章段の出自が一樣でないために生じる多様性を認めてはいるが、そのことは関心事ではない。各章段がいかに多様であろうと、一つにまとまつているという点を重視し、完成した時点Ⅱ同一平面で全てを考える。ダイナミックな読みではない。</p> <p>最終的編集者が相당한仕事（様々な素材を厳選し、手を加え、効果的に配列するといった編集作業）をしていると考えるため、完成形全体を対象とし、編集者の意図を読みとることを最終目的とする。</p> <p>完成した時点Ⅱ同一平面で全てを考えるから、成立論的な時間の流れは意識せず、「BあつてのA、AあつてのB」という全方向的な影響関係を考える。</p> <p>章段単位であれ、一章段内の部分単位であれ、初原的／付加的の別を気にすることはない。あくまで、同一平面にならべて読む。</p> |

諸本ごとの有無の差が際立っている章段・部分については、例外的に〈付加的〉な章段・部分と見なす場合もあるが、基本的には〈初原的〉／〈付加的〉の別にこだわらない。言い換えれば、想定した各成立段階ごとの原作者の視点に立つのではなく、最終的に全体をまとめた編集者の視点に立ち、その編集者の意図が現存本の本文のすみずみに反映されていると考える。たとえ原作段階の頃からあるような語句に対しても、編集者が意図的に残した、あるいは、他の語句との関係のなかで再生させたと考えて、成立の早遅にこだわらず、あくまで編集者の視点から本文を読む。また、章段・部分どうしの関係を考えるに際しては、一次↓二次↓三次といった成長・増益モデルの不可逆的な時間の流れに従うのではなく、いずれの方向にも自在に繋ぐことのできる立場をとり、「変化」というとらえ方ではなく、「影響」というとらえ方をする（この場合の「影響」とは、章段単位の全方向の影響関係だけでなく、一章段内の部分単位の全方向の影響関係をもさす）。つまり、相補的解釈とは、段階分けの危険性を避けるために編集者の視点までさがり、ダイナミックにとらえる面白さに代えて編集意図を読みとる面白さを求める、というものである。

なお、本稿では、成立論において〈初原的〉と想定されている部分と〈付加的〉と想定されている部分を対象としてとりあげるが、だからと言って、私自身は、この部分は〈初原的〉である／この部分は〈付加的〉であると認定しているわけではない。

いので、その点を念押ししておきたい。本稿は、一貫して、成立論批判の立場をとっている。まず、段階分けが不確実な点を批判する。と同時に、〈付加的〉と想定する部分について、その成立事情だけを論じたり、質的に劣る付録のように断じたりするあり方を、読みの豊かさといった観点から批判する。ただし、その場合、〈初原的〉と想定される部分ばかり、あるいは、〈付加的〉と想定される部分ばかりを対象に選んだのでは、批判にはならない。もちろん、相補的解釈は基本的にどのような部分でも繋ぐのであるが、成立論的解釈が広く行われている現状を考えると、今は成立論批判をも狙った読みのスタイルが適当と思われる。つまり、〈初原的〉と想定されているか／〈付加的〉と想定されているかにこだわるのは、批判対象に対して照準を合わせるためであつて、その段階分けに依拠するためではないのである。

三 一六段末尾二首の問題

では、相補的解釈の基本理念を説明したところで、以下、具体例をあげて、その詳細を論じていこうと思う。最初にとりあげるのは、一六段である。【表2】上段を参照されたい。現在は没落して暮している有常は、それでも、「昔よかりし時の心」を失わず、気高さを保っている。しかし、貧しいため、「とこ離れて」去って行く妻に何もしてやれない。そこで、友人であ

【表 2】

一六段の本文

外部資料の詞書

| | |
|--|--|
| <p>むかし、紀の有常といふ人ありけり。三代の帝に仕うまつりて時にあひけれど、のちは世かはり時うつりにければ、世の常の人の^ももあらず。人がらは心うつくしく、あてはかなることを好みて、こと人にも似ず。兼しく^難難てもなほ昔よかりし時の心ながら、世の常のごともしらず。年ごろあひなれたる妻やうやうとこ離れて、つひに尼になりて、姉のさきだちてなりたるところへ行くを、男、まことにむつまじきことこそなかりけれ、いまはとゆくをいとあはれと思ひけれど、兼^けけ^け思ひわびて、ねむごろにあひ語らひける友だちのもとに、「かうかう今はとてまかるを、何事もいささかなることもえせでつかはすこと」と書きて、おくに、</p> <p>手を折りてあひみしことを数ふればとをといひ つづ四つは^經にけり</p> <p>かの友だちこれを見て、いとあはれと思ひて、夜のものまでおくりてよめる。</p> <p>年だにもとをとて四つは^經にけるをいくたび君をたのみきぬらむ かくいひやりたりければ、</p> <p>これやこの天の羽衣むべしこそ君がみけしとた てまつりけれ</p> <p>よるごびに^燃へで、また、 秋やくる露やまがふと思ふまであるは涙の降る にぞありける</p> | <p>(在中将集六九) 年ごろあひしれる女、ものへ行くとて、紀の有常</p> <p>(雅平本業平集一一) 年ごろあひ語らふ人のいみじう若い身わろきことを思ひて、いづかたにいかせむと思ひ顔にて、女の尼になるべきことをいひて</p> <p>(在中将集七〇) いとあはれにて、返し</p> <p>(雅平本業平集一一) 尼の装束を、いとようしてやるとて</p> <p>(雅平本業平集一三) といひにやりたりしかば、いみじうよろびて</p> <p>新古今集ノミニアリ</p> |
|--|--|

る主人公に自らの窮状を述べる。すると、主人公は彼に「夜のものまでおく」つてやる。有常は大変喜んで、感謝の歌を詠む。なお、網掛を施した箇所は有常の没落および気高さを説明している箇所であり、貧しさに関する箇所については特に網掛を濃くしてある。

さて、この一六段で第一に問題にすべきは、段階分けについてである。【表2】下段の在中将集・雅平本業平集は、片桐氏が第二章段か否かを想定する際に依拠した外部資料で、片桐氏の論法では、一六段は、その収録歌が古今集になく両業平集にあるから、第二章段になるらしい。前述したとおり、この段階分けは絶対的なものと認められないため、現時点においては認めることは躊躇されるのであるが、もし仮に、収録歌が古今集になく両業平集にある↓第二章段、という論法に従ったとしても、両業平集には一六段の網掛部の情報がないわけだから、片桐氏が想定する第二章段の原伊勢物語にも網掛部のような情報があったとは断定できない。段階分けは、細部の語句レベルまで通用するものではないのである。そして、(初原的)な物語世界がどの程度のものであったかを正確に把握できなければ、当然、(初原的)な物語世界から(付加的)な物語世界への変化を追うダイナミックな読みもやめざるを得ない。

第二に問題にすべきは、末尾二首の読みについてである。片桐氏は、この部分について、次のように述べている。

相手の男、紀有常は、それ(田口注：「友だち」)から「夜

のものまでおく」られたことをさすと思われる)を物質的
な援助としか感じえなかつたのか、富と貧、貴と賤とい
とらえ方で謝辞を呈している。―中略―天人のようにす
ばらしいあなたがお召しだったのですねと、相手を雲の上
人になつりあげ、最高敬語ともいふべき尊敬語の「たてま
つる」を用いている。友だちという感じでは全くない。次
の「秋やくる」の歌も大げさすぎて内容がない。野口元大
氏も指摘されたように(「みやびと愛―伊勢物語私論―」、
『古代物語の構造』所収)、この二つの歌はそれまでと世
界を異にしている。「これやこの」の歌は『在中将集』に
なく『雅平本業平集』にのみあり、「秋やくる」の歌は
『在中将集』『雅平本業平集』ともになくて後人が徐々に
増補していった歌であることが知られる。印刷がなく書写
によつて本がひろがつてゆく時代には、読者・書写者もま
た第二、第三の作者であつたというわけだが、作品本来の
心はやはりだんだんと失われていったようである。

ちなみに、引用文中にでてきた野口氏も、末尾二首が「増補者」
の手によるものと断じたうえで、「形式的な技巧をこととした、
いい気なもの」と評し、「有常像の低俗化」が見られると説い
ている。つまり、両氏は、質的に劣化した(付加)として末尾
二首をとらえているわけである。

しかし、この考えには納得できない。末尾二首を(付加的)
な部分と見なす段階分け自体が確定的事実として受け入れられ

ないことは前述したが、それより、何より、成立論的に「この
二つの歌はそれまでと世界を異にしている」と見なせば、前置
き―結末といつた基本的な繋がりを断つことになつてしまふの
である。一六段冒頭の地の文には、没落して貧しい有常の姿が
示され(濃い網掛部)、それゆえに友人に援助を求める有常の
姿が示される。これが前置きである。つづいて、第一首目には、
妻と四十年も連れ添つたという有常の歌がきて、「夜のものま
でおく」る友人の対応が示された後、第二首目に、第三者的立
場から有常夫婦の四十年を想像する友人の歌がくる。確かに、
友人の対応は示されているから、前置きに対する一応の結末は
あると言えなくもないが、「夜のものまでおくりて」という情
報だけでは物足りない。友人の歌には援助に関する情報はない
し、そもそも、濃い網掛部であれだけ窮状を強調されていた有
常の謝辞が示されないうちは、真の結末を迎えたことにならな
いはずである。有常の謝辞である第三・四首目末尾二首は、決
して余計な部分とは思えないのである。眼前の本文は、不確か
な成立論的時間軸を意識せず、あるがままに読みたい。末尾二
首を片桐氏や野口氏のように「友だちという感じでは全くない」
・「大げさすぎて内容がない」あるいは「いい気なもの」と鑑
賞しても、鑑賞は鑑賞だから、そのこと自体は構わないが、そ
の鑑賞と成立論の段階分けを結び付けると、肝心のストーリー
がどこかへ行ってしまふことも起こり得るのである。

四 八二段第一部的問題

八二段の場合は、〈付加的〉と見なした部分の質的劣化を説いていないため、段階分けと読みが結び付いているとは言えないが、それでも、八二段内部の段階分けには問題があるし、読みに関しても、より相補的に部分どうしを繋ぐ必要があると思われるので、やはり、段階分けと読みの両方について批判しておきたい。

はじめに、片桐氏による段階分けを確認しておこう。

私はこの段を第一次『伊勢物語』と考へ（拙著『伊勢物語の研究 研究篇』、本書の総説にもそのように分類しておいたのであるが、厳密に言えば、この第一の部分だけは第二次『伊勢物語』増補の際、補筆されて補充されたと考へてよいと思う。

片桐氏の論法では、基本的に、古今集業平歌章段は、古今集が成立する前から存在した第一章段となる。【表3】に示したとおり、第一・二・三部の各収録歌は、古今集に業平作として収められている。ただし、古今集業平歌章段の全てが第一章段になるわけではなく、なかには古今集成立後に物語化された章段・部分もあるそうで、八二段第一部もそうした例外の一つとされている。【表4】上段にその論拠をあげておいたので、参照されたい。

しかし、その【表4】上段の論拠も、決定的な証拠とは言い

きれない。【表4】下段に示したとおり、例外がある、サンプル数自体が少ない、別の可能性も想定できる、などの点で相殺できるから、従えないのである。なお、念のため断っておくが、私は別の可能性も想定できると述べているが、だからと言って、別の可能性を想定すべきであると主張するつもりはない。あくまで「別の可能性も想定できる」というだけで、上段の理由を相殺できれば、それ以上は踏み込まない。現実には、第一部は〈初原的〉な部分かもしれないし、〈付加的〉な部分かもしれないが、現時点ではどちらとも言えないから、〈初原的〉か／

次に、片桐氏の読みを見てみよう。片桐氏によれば、八二段の「眼目」は「惟喬親王の風流にある」という。そして、八二段と八三段前半部では「理想の風雅」を描き、八三段後半部でそれが「遠い過去のものになってしま」ったことを描いているのだという。つまり、八二段を美しい思い出のシーンと考へているようなのである。もちろん、政治的敗者としての惟喬親王の〈陰影〉に関する言及もあるが、片桐氏の場合は、三代実録などの他文献の情報を紹介したうえで、

そのような親王を主人公にして、しかも風流という反政治的なものによって、君臣合体、君臣和楽の理想を提示しようとした物語作者の姿勢に、注意を払わなければならぬ

と述べているだけで、惟喬親王の〈陰影〉を積極的に説いているわけではない。惟喬親王の〈陰影〉を知らせるヒントが八二

【表 3】

| 八二成の本文 | 外部資料の調査 |
|---|---|
| <p>(第一節) むかし、惟喬の親王之中、親王おはしましけり。 山崎のあなたに、水無瀬といふ所に宮ありけり。年 ごこの祇の花をみかたは、その宮へはむおはしまし ける。その時古の馬頭なりける人を、常に奉ておは しましけり。時世てへ、しうくなりければ、その人 の名をたにけり、彼はねむらにみせで酒をのみ飲 みつつ、やまと歌にかかれりけり。いま持する交野 の瀬の歌、その歌の邊にたにみせしうし、その木の 下におり居て、故を弄りてかかしたまして、上中下 みな歌よみけり。馬頭なりける人のよめる。</p> | <p>(古今集五三) 海の院にて祇を見てよめる 在 原業平 御臣 (在中将集四) 海の院にて祇の花を (雅平本業平集四六) 惟喬の親王、海の院といふ所に、祇の花見におほし たりしに</p> |
| <p>世の中と絶えて祇のなかりは春の心はのこけ からまし うなむよみたりける。また人の歌、 祇の花見にたにみせしうし、その木の 下におり居て、故を弄りてかかしたまして、 て水の下はせよてかへると、日暮になりぬ。</p> | <p>ナシ (古今集四一八) 惟喬の親王の供に侍にまかりける時に、天の河とい ふところの河のほとりにおり居て酒など飲みけるつ いでに、親王のいひけらく、「結して天の河原にい たるといふ心をよみて、杯はをせ」といひければ、 ちめる 在 原業平 御臣 (在中将集四五) 惟喬の親王、「侍して天の河にいたるといふ心よめ とはべりければ (雅平本業平集四七)</p> |
| <p>(第二節) 御供なる人、酒をもたせて食なり出できたり。こ の酒を飲みてむとて、よき所をもとめゆくと、天の 河といふところここに立りぬ。親王に馬頭大御禮をな 親王ののたまひける。「交野を侍りし、天の河のほ とりにいたるを聞にて、歌よみて杯はをせ」とのた まひければ、その馬頭よみよみける。 侍り書らし御供津女に宿らむ天の河原に我は 来にけり</p> | <p>(古今集四一九) 親王の歌をかへすがへすよみつつ、返しえせず りにければ、供にはべりてよめる 紀の有常 (在中将集四六) 親王かへすがへすめで給ひて、返しえし給はるりけ れば、御供にありける紀の有常 (雅平本業平集四八)</p> |
| <p>(第三節) かへりて宮に入らむ給ひぬ。夜ふくるまで酒飲み 物語して、あるじの親王、酔ひて入り給ひなむらす。 十一日の月もかくれなむとすれば、かの時頭のみめ る。</p> | <p>(古今集八八四) 惟喬の親王の折しけるよにまかりて、酒りにかへ りて、夜ひと夜酒を飲み、物語をしけるに、十一日 の月もかくれなむとしける折に、親王酔ひてうちへ 入りなむとしければ、よみはべりける 業平御臣 (在中将集五六) 惟喬の親王の供に侍にまかりて、かへりて、夜ひと 夜酒飲みし、物語しけるに、十一日の月入りなむ らしける折、親王酔ひて入りなむとしければ (雅平本業平集四九)</p> |
| <p>あかなくはまなきも月のかくるか山の嶺にけ て入れずもあらむ 親王にかはりたてまつりて、紀の有常、 おしなべて嫌もたひらになしなむ山の嶺なく は月も入らむを</p> | <p>(古今集一二四九) かくて、この宮かへりたまで、酒など飲みて還らば ばに、親王酔ひて入り給ひなむとすれば</p> |
| <p>(後集一二四九) 月夜にかれどしとて</p> | <p>土岐兼光</p> |

【表 4】

| 片桐氏の論拠 | 疑問点 |
|---|--|
| <p>「惟喬親王」というように実名を出すのは、本来の『伊勢物語』の形ではない。業平以外の別人の紹介から物語が始まるのは、総説に例示したように(二六ページ参照)第二次『伊勢物語』の特徴である。</p> <p>物語の主人公について、「時世経て久しくなりにければ、その人の名忘れにけり」というようなポーズをとって船晦する、言いなおせば語り手自身が主人公であるという姿勢を示すのも、第四十段・七十六段など第二次『伊勢物語』の特徴である。</p> <p>第一次『伊勢物語』は『古今集』の選集資料になつたはずだが、この部分については、「渚の院にて、桜を見てよめる」という『古今集』の詞書は簡単に過ぎ、惟喬親王に従つていふことすらも記されていない。</p> <p>また、「散ればこそ」の歌についても『古今集』は全く触れるところがない。</p> <p>略本系の伝民部卿局筆本ではこの部分だけを独立させて以下の部分と別の章段にしている。</p> | <p>疑問点</p> <p>そもそも、段階分けの方法自体が絶対的なものと認められないから、「本来の『伊勢物語』」あるいは「第二次『伊勢物語』」の「特徴」を説くのはどうかと思う。また、片桐説では「本来の『伊勢物語』」にならないはずの、第三次の成立とされる章段(六・三八段)にも、実名は出ないが、「業平以外の別人の紹介から物語が始まる」例は確かに第二次の成立とされる章段にしかないが、第二次の成立とされる章段の多くがその形式をとるわけではない。鑑賞日本古典文学一六頁にあげられた例は全八例で、サンプル数は十分とは言えない。</p> <p>右に同じく、段階分けの方法自体が絶対的なものと認められないから、「第二次『伊勢物語』」の特徴を説くのはどうかと思う。また、第二次の成立とされる章段の多くに語り手兼主人公の「船晦」が見られるわけではない。そのサンプル数が四〇・七六・八二段の三例では、十分とは言えない。</p> <p>歌物語化した原伊勢物語だけが古今集の選集資料になつたとはかぎらない。歌物語化していない原業平集のような選集資料も想定できる。古今集成立前から第一部のような歌物語が存在したとしても、歌集的な選集資料の方が参照されれば、古今集の詞書も歌集的な簡潔なものになつただろう。また、古今集のどの部立に収められているかにも注意したい。歌意を理解するためには詳しい状況説明(詞書)があつた方がいい。羈旅歌・恋歌・雑歌などに比べ、四季歌はそれほど詳しい詞書を必要としないはずである。第二・三部の古今集業平歌が羈旅歌・雑歌であるのに対し、第一部の古今集業平歌は春歌であり、長大な詞書が不要だったのかも示れない。</p> <p>第一部第一首までの部分に対して第一部第二首だけが後の(付加)であるとするならば、上記のようなことも起き得る(第一部第二首の(付加)については、片桐氏自身が指摘している)。また、第一部第二首が古今集成立前からあつたとしても、古今集が必ず採るとはかぎらない。</p> <p>略本系には後人の意図的改変も多く認められる。略本系が元来繋がっていた章段を分断した可能性もある。もちろん、そうでない可能性もあるが、現時点では何とも言えないのだから、証拠としてあげるべきではない。</p> |

段の本文中にあるとは言っていないし、また、第一部の解説では「みな供に風流を楽しむ世界」、第二部の解説では「前よりもさらに楽しい気分」、第三部の解説では「またまた楽しい酒」といった表現を用いて、〈楽しさ〉を強調している。そのため、私にはとても「注意を払」っているように思えないのである。

しかし、栄華から遠ざかって行く惟喬親王グループのイメージは、ひとえに読者の予備知識にゆだねられているわけではない。読者の予備知識を活性化させるヒントが、八二段の本文中に仕掛けられている。網掛を施した第一部第二首が、それである。既に上坂信男氏は、この歌について、

『古今集』春下の詠人不知歌「残りなく散るぞめでたき桜花ありて世の中果ての憂ければ」を踏まえて唱和したのであろう。

と想定したうえで、

「うき世」の語を用いて現在を憂きものとしているところに、「果て」を憂しとみる原歌にはみられない感情の表現をみる。これが『伊勢物語』作者の虚構であつたら作者の意図の露頂とみてよいだろう。

と述べている。また、上坂説を引く佐藤裕子氏は、第一部第二首について、これが「付加されたことよって惟喬親王や、その周囲の人々に、世を嘆く姿を、付け加えたことになる」と述べている。両氏は成立論的解釈を批判しようとしているわけではないが、第一部第二首がこの世の憂さを表現しているという

指摘は重要である。第一部第二首が〈ある〉ことよって、第一部全体および第二・三部をも含めた八二段全体が〈陰影〉を帯びてくる。第一・二・三部の「風流」が、政治的敗者の憂さ晴らしに見えてくる。前掲の鑑賞日本古典文学の解説のなかで、第一部は「補筆されて補充された」部分と想定され、さらに、『伊勢物語の研究（研究篇）』では、第一部第二首は第一部第一首までの部分より新しい時期の〈付加〉と想定されているが、¹⁰皮肉なことに、その第一部および第一部第二首に注目すれば、片桐氏の説く「反政治的」な「風流」をイメージできるのである。

とすれば、その第一部および第一部第二首を重視せず、八二段を美しい思い出のシーンととらえる読みは、物足りないのではない。極論すれば、八二段は、そして、伊勢物語は、第一部および第一部第二首が〈ある〉からこそ、八二段であり、伊勢物語である、と言える。言い換えれば、第一部および第一部第二首を積極的に他の部分と繋がなければ、八二段および伊勢物語を読んだことにならない、とも言える。読みの豊かさという点から見ると、第一部および第一部第二首がたとえ〈付加〉であつたとしても、そのことにこだわる必要性はないと思うのである（ちなみに、第一部第二首については、位置的に考えて〈付加〉である可能性が高いと私も思うが、もちろん、そのことに関心はなく、第一部第二首を軽視するつもりもない）。

五 八七段第三部の問題

八七段に目を移そう。八七段については、第一部の本文とそれに対応する外部資料の詞書を【表5】に示すにとどめるが、全体のあらすじは示しておく（私なりの解釈をまじえているが、その詳細は拙稿「伊勢物語八七段の解釈」を参照されたい）。

（第一部）

舞台は、蘆屋。「なま宮仕へ」している「男」のもとに、似たような境遇の者たちが集まる。その中には「男」の兄もいて、彼は身の不遇を露骨に嘆く。当然、その場の雰囲気は暗くなる。しかし、「男」が笑いを誘う軽い歌を詠み、重苦しい空気を払拭する。「男」の暖かい思いやりとスマートな対処は、周囲の人々から賞賛を受ける。

（第二部）

ハッピーエンドを思わせる第一部を受け継ぐが、全体の色調は再び暗くなり、不幸な運命を予感させる。

（第三部）

「男」の兄を客としてもてなす「田舎人」が、彼を慰める歌を詠む。しかし、その歌の直後に「田舎人の歌にては、あまれりや、たらずや」という評がきて、所詮は田舎者の歌にすぎない、都人にとって慰めにならない、といった虚無感を示す。

本文の情報量を新潮日本古典集成の行数で示せば、第一部：二

【表5】

| 八七段第一部の本文 | 外部資料の詞書 |
|--|--|
| <p>わかし、男、津の国菟原の郡、蘆屋の里にしるよ して、いきて住みけり。昔の歌に、 蘆の屋の灘の塩焼きいとまなみ黄楊の小櫛もさ さすきにけり とよみけるぞ、この里をよみける。ここをなむ蘆屋 の灘とはいひける。この男、なま宮仕へしければ、 それを便りにて、衛府佐ども集りきにけり。この男 のこのかみも衛府督なりけり。その家の前の海のほと りに遊びありきて、「いざ、この山の上のほりて見る いろ布引の滝見ののぼらむ」といひてのぼりて見る に、その滝ものよりことなり。ながさ二十丈、ひろ さ五丈ばかりなる石のおもて、白綱に岩を包めらむ やうになむありける。さる滝の上に、わらうだの大 きさして、さしいでたる石あり。その石のうへに走 りかかる水は、小柑子、栗の大きさにてこぼれ落つ。 そこなる人みな滝の歌よます。かの衛府督まづよ む。 われ世をば今日かあずかと待つかひの涙の滝と 何れたかむむ あるじ、つぎによむ。 ぬき乱る人こそあるらし白玉のまなくもちるか 袖のせはばきに とよめりければ、かたへの人笑ふごとにやありけ る。この歌にめでてもみにけり。</p> | <p>(万葉集二八二) 石川少郎歌一首※類歌 (雅平本業平集二七) 津の国菟原の郡、蘆屋 の里にて (雅平本業平集二八) 布引の滝に、集りゆき て、その滝に玉のいみ じうこぼるるに、行平 の中納言 (古今集九二二) 布引の滝のもとにて、 人々集りて、歌よみけ る時によめる 業平朝臣 (在中将集五九) 布引の滝のもとに、こ れかれまかりて 「雅平本業平集二九」 返し</p> |

一行／第二部：六行／第三部：七行となる。一見すると第二・三部は単なる後日談のような印象を受けるが、そうではない。八七段内における第一部との繋がり、さらに、八七段の前の一連の章段群との繋がりを考えると、特に末尾の評を全体の締め括りとして重視しなければならないと思うのである。本節では、この評を含む第三部に焦点を当て、第三部を他の部分・章段と相補的に繋ぐことの有用性を論じる（ただし、その前に、成立論的解釈ではどう読んでいかを確認しておいてから、成立論批判の一貫として、相補的解釈の有用性を説く）。

まず、段階分けを見ておこう。片桐氏は、八七段の成立過程について次のように述べている。

『古今集』に業平作とする歌を含んでいるがゆえに便宜的に第一次『伊勢』に数えているこの段についても、私はむしろ第二次『伊勢』に含めたほうがよいのではないかと思っている。――中略――それにしても、「君がためにはをしまざりけり」（田口注：第三部で「田舍人」が「男」の兄のために詠んだ歌）というのはいさしひつかかる。この歌、本来は自分の愛する人のために海松を供する時の歌であったのを、ここに利用して客人に対して詠んだ歌のように物語を作ったのであろう。男の歌と贈答の形になっていないゆえに「在中将集」も「雅平本業平集」も採歌しなかったとも考えられるが、この部分（田口注：第三部）だけが、全く別の歌として伝承されていた歌を利用して物語を作

る、例の第三次「伊勢物語」の物語作法によってできた付加であるかもしれない。

ちなみに、第一・二部を「第二次『伊勢』に含めたほうがよい」というのは、そこで「強調」される「挫折や不遇」の背景に「第二次『伊勢』の作者の在原氏意識と対藤原氏コンプレックス」があるからだという。

しかし、納得できない点が少なからずある。

その第一点は、文献操作では第一次の成立だが、内容的には第二次の成立になる、という論法である。これは、論理的に矛盾しているのではないか。そもそも、文献操作によって想定した段階ごとに、その内容的特徴を指摘したわけだから、文献操作による段階分けと段階ごとの内容的特徴の不一致はあつてはならないはずである。

第二点は、その内容的特徴自体についてである。「在原氏意識」または「対藤原氏コンプレックス」とは、第二次の成立とされる七九・八〇・一〇一段などを見ての表現だろうが、そうした特徴は、第二次の成立とされる章段の多くに認められるわけではない。サンプル数が十分ではないのである。

第三点は、一六段の場合と同じく、仮想する原伊勢物語の情報量についてである。詳しくは拙稿「伊勢物語八七段の解釈」を参照されたいが、物語の発端になる第一部で特に重要なのは、不遇を嘆く兄の歌、および、「男」の歌を聞いた周囲の人々の反応である（表5）上段の網掛部。八七段は、第一部で暗い

現実から一時的に救われるさまを描き、第二・三部で暗い現実から逃れられないことを再認識・再々認識するさまを描くのであるが、兄の歌は「暗い現実」を読みとるために不可欠であり、周囲の反応は「暗い現実から一時的に救われ」たことを読みとるために不可欠なのである。しかし、【表5】下段に示したとおり、兄の歌は古今集・在中将集になく、周囲の反応にいたっては古今集・在中将集・雅平本業平集のいずれにもない。古今集・両業平集から原伊勢物語の姿を想定できるとする片桐氏の論法に仮に従ったとしても、これでは、原伊勢物語があまりにも未発達だった可能性がでてくる。もちろん、古今集・両業平集が全ての情報を採録したわけではないという可能性も想定できるが、そうであると断定できるわけでもない。ちなみに、本文は省略したが、第二部についても、拙稿「伊勢物語八七段の解釈」で重要であると指摘した「うせにし宮内卿もちよし」という情報が、対応する在中将集七二・雅平本業平集三〇の詞書にない。この情報は「暗い現実から逃れられないことを再認識」させるきっかけとして不可欠であり、さらには、第三部の「田舎人」の歌とも関連する。「うせにし宮内卿もちよし」が原伊勢物語にあつたかどうか判然としないのなら、その原伊勢物語は読みの対象にはなり得ない。不親切なほど寡黙な伊勢物語の真意を読みとるには、時として一つ一つの細かな語句に執拗に拘泥しなければならぬ、と私は考えているが、〈第何段階の

原伊勢物語〉は細部の語句の有無が不明確な場合がある。結局、

編集者の視点までさがって眼前の本文があるがままに読むしか道はないのではなからうか。

第四点は、第三部の成立段階についてである。前掲の片桐氏の解説では、第二次以前の成立だが両業平集が採らなかつたという案と、第三次の成立で両業平集成立時にはまだなかつたという案の両方が提示されている。これは、段階分けの曖昧さ・限界をあらわしているように感じられる。

以上の四点と、段階分けの方法自体に対する以前からの疑問を合わせると、八七段内部の段階分けには従えないのである。

さて、八七段内部の段階分けの紹介と批判に紙数を使いすぎてしまったが、ここから、本題の、読みに対する批判に移ろう。八七段の場合は、第三次の成立かもしれないと言われる第三部の質的劣化が説かれているわけではないので、特に強く批判することもないのであるが、それでも、第三部の解説には物足りなさを感じる。鑑賞日本古典文学では、「海松を高杯にもりて」の項目のみがあげられ、「うまい物紹介」である点や「不老長寿をそれほどまでにことほ」ぐ点が言及され、最後に前掲の成立過程の想定がくるのであるが、重要なのは、第三部が〈ある〉ことよって他の部分・章段との間にどのような相補的意味が生じているかということではないのか。〈付加的〉な部分かもしれないという意識からか、第三部は軽視されているように感じられるのである。

まず、第一・二部と第三部の相補的關係を確認しよう。あら

すじ紹介のところでは、第一部では、「男」の思いやりと（みやび）によって兄と仲間たちが一時的に慰められ、第二部では、一転して不幸な運命が予感させられる。ただし、第二部の表現はあまりにも暗示的で、これだけでは、憂情を背負いつづけなければならない者の虚無感を描いたことにはならない。そこで、第三部が、そのやるせなさを印象づける（締め括り）として機能するのではないか。第三部では、兄を慰める「田舎人」の歌と、それを否定する都人側からの評が記される。ここでは、田舎を否定する田舎女章段や再会章段などの相補的關係を想定し、「田舎人」の歌が慰めになっていないことを読みとって、第三部が（前置き）の第一部と（繋ぎ）の第二部を受ける（締め括り）になっていることに気付くべきではないか。つまり、第一・二部と第三部は互いになくなくてはならない存在と考えられるから、軽視されがちな第三部にもつと目を向けるべきである、と言いたいのである。

次に、八七段第三部と、その前の七七〜八五段との相補的關係を論じてみよう（厳密に言えば、この関係は章段対章段の関係であり、一章段内の部分単位での考察を行う本稿の守備範囲ではないが、八七段第三部を重視する点は同じなので、ここでもとりあげておく）。七七〜八五段は、不遇なイメージの人物が登場する章段群である。七七・七八段の藤原常行は、その父の良相と良房の関係から、敗者としてとらえることができる。本文を見ても、「翁」の歌にある「春の別れ」という表現（七

七段）や、隠棲する「山科の禪師の親王」への常行の接近（七八段）が、敗者としての常行像を想起させる。七九段の在原氏は、一族の中に親王が生まれたことを喜んでいて、その背景に厳しい現実があるから喜んでいて、実際、将来を「夏冬」というすじにくい季節にたとえている。ちなみに、直後の八〇段は、在原家とおぼしき家を「おとろへたる家」と表現している。七九段の「夏冬」の意味は直後の八〇段によって確認されるのであり、また、八〇段の「おとろへたる家」は、直前の七九段でかすかな希望が示されるがゆえに、両段の間に落差が生じ、その衰運の悲哀が増幅されるのである。七九段と八〇段は相補的に繋がっていると言える。八一段の源融については、次節で述べる。八二段の惟喬親王については前節で述べたとおりであるが、惟喬親王は八三・八五段にも登場し、こちらはより（不遇）を読みとりやすくなっている。八四段は、宮仕えが障害になる状況設定が八三段と共通するゆえに八三段の次に配置されたとも考えられるが、登場するのが主人公の母（伊登内親王）であり、彼女が都の外（長岡）で孤独な老後をおくっていることを考えると、八四段もまた、七九・八〇段同様、在原一族の（不遇）をあらわしているように思える。なお、八六段は、（不遇）とはまた別のテーマの関連によって八五段直後に配置されたと考えられるので、ここではとりあげない。以上、七七〜八五段を見てきたわけであるが、派生的な八六段をばさんで七七〜八五段の後に位置する八七段は、一連の章段群

の（締め括り）として機能しなければならぬはずである。となると、当然、八七段はハッピーエンドでは困るわけで、その意味で、八七段第三部が重要になってくる。八七段第三部は虚無感を印象づけ、八七段第一・二部ばかりでなく、七七―八五段に対しても、ハッピーエンドを拒む（締め括り）の重責を果たしていると言える。八七段第三部は、決して軽視されていいような部分ではない。

他の部分・章段との間に生じる相補的意味を追求することで、読みは深化する。ある章段・部分がどのような過程を経て（付加）されたかを考えたところで物語世界の奥行が増すわけではないが、その章段・部分が（ある）ことによつてどのような相補的意味が生じているかを考えれば物語世界の奥行は増す。八七段第三部を例にとつてみると、そのことがわかるのではないかと思う。

六 八一段歌後部の問題

最後に八一段を見てみよう。八一段と外部資料（在中将集・雅平本業平集）の関係は、【表6】に示したとおりである。歌までの情報量に大差はないが、問題は歌より後の解説の部分である。この部分を片桐氏は（付加）と見なし、しかも、「くどくどしい説明」と評して質的劣化を説いている。両業平集を用いた段階分けの有効性はともかく、歌後部の位置や内容を考え

ると、確かに原資料になかった可能性は高いと言える。しかし、もし歌までの部分が原初形態であると仮定しても、その部分を「読むだけではどこか物足りない。歌後部まで通して読んだ方が、八一段はより伊勢物語らしく読めると思われる。本節では、段階分けの有効性に対する批判は省略し、読みに対する批判のみを行うが、具体的な手順としては、他の章段と八一段を繋ぐことの有用性、そして、八一段内の歌後部と歌以前部を繋ぐこと

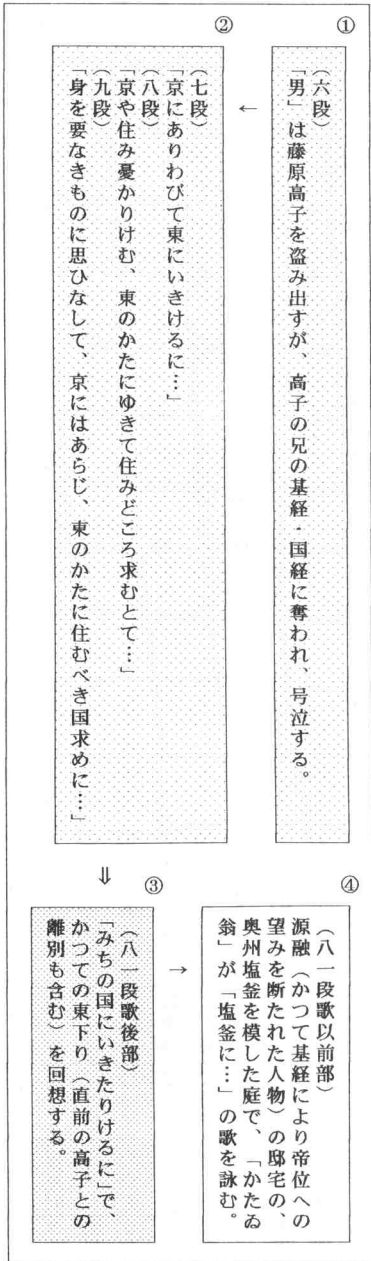
【表6】

| 八一段の本文 | 外部資料の詞書 |
|---|--|
| <p>むかし、左のおほいまうちぎみいませがりけり。 賀茂川のほとりに、六條わたりに、家をおもし ろく造りて住み給ひけり。神無月のつごもりがた、 菊の花うつろひざかりなるに、紅葉の千種に見ゆる 折、親王たちおはしまして、夜ひと夜、酒のみし 遊びて、夜あけもて行くほどに、この殿のおもしろ きをほむる歌よむ。そこにありけるかたは翁、板敷 のしたにはひありきて、人にみなよませ果ててよめ る。</p> | <p>（在中将集四一） 左のおほいまうちぎみ 賀茂川のほとりに家を おもしろく造りて、神 無月のつごもり、菊の 花ざかりなるころ、親 王たちおはしまして 日ひと酒飲み、遊び したまふ、この殿のお もしろきよし人々よみ けるに</p> |
| <p>塩釜にいつか来にけむ朝なぎに釣する舟はここ によらなむ となむよみけるは、<small>（あちの國に轉遷たむ討逐經、あ やしくおもしろき所々おほかりけり、わがみかど六 十余國の中に、塩釜といふ所に似たるころなかり けり。さればなむ、かの翁、さらにここをめでて、</small> 「塩釜にいつか来にけむ」とよめりける。</p> | <p>（雅平本業平集六五） 左大臣の家に、親王九 ち花見におはしたり。 その家に、塩釜のかた を造りたり、これを鹽 にて人々よむに</p> |

ぐことの有用性を考え、そのうえで、歌後部が「くどくどしい説明」かどうかを考える。

【表7】下段には、八一段の歌以前部④と歌後部③で重要と思われる点をあげ、【表7】上段には、八一段と相補的関係にあると思われる二条后章段の六段①と東下り章段の七・八・九段②をあげた。①④の番号順に読んでいこう。基経によつて高子を奪われたという①の情報は、②の東下り章段群の冒頭部に繋がり、それが都を出る原因の一つになっているのではないかと想像させる。そして、①の対基経意識と②の都落ちの情報は、「翁」がかつて「みちのくにに」つたことがあるという③の八一段歌後部の情報【表6】上段網掛部参照）に

【表7】



よつて、再び思い出されるところとなる。言い換えれば、③の八一段歌後部の情報は、①・②の情報を八一段へと流入させる窓口として機能している、とも言える。そうなると、④の八一段歌以前部にある、源融をさす「左のおほいまうちぎみ」と、源融邸の庭について言った「塩釜」も、①③の情報と呼応し、相補的関係のなかで新たな意味を獲得する。左大臣源融は、かつて基経によつて帝位への望みを断られたという人物であり、そのことは伊勢物語三九段最末尾の「みこのほいなし」にも暗示されている(相補的関係)。これが③から流入する①の対基経意識と共鳴し合い、彼と「かたる翁」の連帯感をあらわすのではないか。また、「塩釜」についても、③から流入する②の

情報によつて、單なる風光明媚の地ではなくなる。八一段において陸奥は「あやしくおもしろき所々」の多い地として説明され、「かたる翁」自身もそのように認識しているかのようであるが、②の諸章段における「東」は都落ちの地であつたし、一四段・一五六段における「みちの国」は「すずろ」な流離の終着点であつた。「塩釜」は表面的には名所として説明されるものの、「塩釜」が真に意味するものは、おそらく、「風光明媚」でなくて、「都落ち・流離」ではなからうか。これは、風流を楽しんでるように見える源融や寿ぐ役割を果たしているだけに見える「かたる翁」が実は「陰影」を背負つた者であるといふことと、同じ構造である。④の「左のおほいまうちぎみ」および「塩釜」は他章段との相補的關係のなかで真意を獲得する、と言える。そして、その①・②と④の關係を成り立たせているのが、③の歌後部なのである。だから、当然、③の歌後部を余計な部分と見なす成立論的解釈には従えないのである。

ちなみに、成立論批判の立場から八一段を論じたものは既に他にもあるので、それについて触れておこう。神尾暢子氏は、

「冗長」あるいは「蛇足」と言われている「いわゆる後人補入の部分」(歌後部の語句だけとはかぎらない)をとりあげ、

源融章段は、いわゆる後人補入の部分とともに、一個の統一し充足した章段世界を形像するものと認定しなければならぬ。

と述べている。¹²⁾この考え方自体には賛同できる。ただし、細部

の論証に関しては首肯できないところが少なからずあるし、他章段からの情報を引き込むか/他文献からの情報を引き込むかというアプローチのちがいも見られる。たとえば、「塩釜」が「哀愁」を誘う場所であるとは指摘されているのであるが、そのことは古今集などの他文献の塩釜詠を参考にして論じられている。しかし、伊勢物語のなかの一章段を読むという姿勢をより徹底させるなら、東下り・東国章段と関連させた方がいい、と私は考える。(付加的)と見なされている部分をも重視して一つの章段を読むという姿勢は同じでも、その先に他章段への目配りがほしいのである。

以上、八一段を見てきたが、その歌後部は、八一段だけを眺めるのであれば、「くどくどしい説明」と言えるかもしれない。しかし、他章段をも視野に入れる時、歌後部はいかにも伊勢物語的な意味を付与されて、歌以前部との共鳴を起す。その共鳴を聞き取ることが八一段を読むことであると考える私としては、歌後部を軽視するわけにはいかないのである。

七 結 び

幸か不幸か、三段階成立論の段階分けは、絶対的な信頼性を有しない。現時点においては、どこまでが(初原的)でどこからが(付加的)かを正確に決定することはできない。ならば、どのような章段・部分どうしであつても全方向的に繋ぐことの

できる立場、すなわち、最終的編集者の視点に立つしかならないのではないか。

また、読みを深化させるためにも、そうした視点に立つ必要があると思われる。そう考えるようになったのは、伊勢物語のあまりにもことば足らずな表現に直面してからである。一つの章段・部分を見ているだけでは、解釈できない箇所が少なからず出てくる。そうした箇所につづかつた際、他の章段・部分に参照し、その情報のことば足らずな章段・部分に流入させる。すると、問題を解決できることがある。言い換えれば、相補的に解釈されることを前提としているからこそ、伊勢物語はことば足らずでいられるのかもしれない。

今後は、より広い範囲を網羅できるよう、様々な章段・部分の相補性を考えていきたい。

(注)

- 1 本稿で「成立論」と呼ぶのは、片桐洋一氏のいわゆる三段階成立論と、それにもとづく成立論的解釈をさす。
- 2 福井貞助氏編『伊勢物語―諸相と新見―』平七・五刊行予定 風間書房。
- 3 「雅平本業平集の編纂態度―その詞書の生成過程と典拠資料についての考察―」(『三田国文』 昭六三・六)。「狩使本伊勢物語の二部の構造―現存業平集と伊勢物語の関係についての考察―」(『中古文

学』平一・五)。「伊勢物語歌の『業平歌らしき』―新古今集・新勅撰集の採歌態度についての考察―」(『解釈』 平二・二)。「狩使本伊勢物語について―その断片資料に見る新しさ―」(『中古文』 平二・一二)。「伊勢物語の地の文における対人物ソ／コ系指示語の使い分け」(愛知教育大学『国語国文学報』 平五・三)。

4 片桐氏の具体的な段階分けについては、鑑賞日本古典文学の総説(一五―一六頁)および同書の各段解説によった。ちなみに、段階分けの論法については、片桐氏『伊勢物語の研究(研究篇)』(昭四三・二 明治書院)に詳しい。

5 以下、片桐氏の言葉を引用・紹介する場合は、鑑賞日本古典文学の各段解説による。

6 「古代物語の構造」 昭四四・五 有精堂 六一頁。

7 鑑賞日本古典文学一九三頁の「理由」をそのまま引いた。

8 「伊勢物語評解」 昭四三・一二 有精堂。

9 「伊勢物語八十二段の生成―「狩」の設定を中心に―」(『中古文』 論叢) 昭五六・一一―二八頁)。なお、佐藤氏は「付加された」・「付け加えた」という表現を使っているが、成立論的な時間意識を基本的にもたない相補的解釈では、この種の表現は使わず、ただ「ある」と表現する。

10 二〇六頁。

11 「解釈」 平四・六。

12 「伊勢物語の源融章段」(『中古文』 昭五七・一〇―一二頁)。